



エ ピ ロ ー グ

消失が始まり、核ミサイルが到達した。日本は大打撃を受けた。いや、世界中が混沌とした。

消失は止んだ。

本当に止んだのか？

今この瞬間にも世界のどこかが、いやこの場所が消えるかもしれない。

これは、誰の意志なのだ。

世界中が、息を殺して見つめている。

核のボタンを押した者は、反撃に怯えながら。

先制攻撃に終わりはない。

次の刃を振りかざしながら、自らの妄想に窒息しそうだ。

開眼大悟は見事だった。

一体、何の権限があつてそんな命令を下すのか、疑問を抱くものは誰一人いなかった。全ての人間が彼に従った。

大悟はひとつのテレビ局に二十四時間自分を映させた。今、自分は日本のトップにいる。全てを曝け出している。監視するがいい。全世界に、そう言い切った。

同時に国内に向けては、説明し続けた。今、自分が日本国民のために何をしているかを。一つ一つ解決していくしかない。誰から助けるか、どう助けるか、一度にすべてのことは出来ない。

い。自分は多数のところから手をつけている。そこには何の私心もない。後回しにされたことを不公平に感じて、仕方ない事と諦めてもらうしかない。もし、自分以上のリーダーがいるのなら、自分を殺してトップに据えればいい。今はそれほど危機なのだ。緊急を要するときなのだ。自分が殺されてこの事態がよりよい方向に向かうなら、むしろそれを望む。殺されることに何の異存もない、とまで言い切った。

この大混乱の中、これほどの火中の栗を拾えるもの、いや、拾おうとする愚か者は大悟をおいて他にない。

彼は、避難区域特定、誘導優先順位、物資の支援、その為の道を切り開き、放射能を測定し……。

とにかく思いつく限りあらゆる対策を講じた。もちろんそれは一人でできることではない。

TVの支配は休場であったし、医療関係は海老沢、頼子夫婦。

避難の誘導、啓開、物資の支給の陰には、笹原を頂点とするサクヤグループの働きがあった。多枝の手腕は如何なく発揮され、瑛佑の行動力は多くの奇跡の救出劇を生んだ。勿論、姉雪那の情報網も外交その他に大きく役立った。大悟のブレインは、危機を乗り越えるために最大限の力を発揮した。

そして、もうひとつの大悟の強みは支持者にある。彼を信頼する人間は多い。学生の頃からずっと街頭に立って演説してきたのである。演説の後は決まって、路上で、商店街で、老人ホームで、イベント会場で、酒を飲みながら、たこ焼き・焼きそ

ば・煮込みを食いながら語り続けた。彼の政治信条がどれほど理解されたかはさておき、ひたすらしゃべりまくるやたらに声の大きいその男が、下心なく良い国を作りたいと願っていることは理解された。おおかたの政治家が、企業のトップや世界の大物と繋がろうとしている時、大悟は道端の人々と繋がっていた。一度会ったら忘れられない個性と純真さが大悟に人の信頼を勝ち取らせた。

大悟は、姉の雪那を、最も愛し、尊敬している。そんな彼には、個々の人間に対する差別や偏見は微塵もなかった。彼にとつて、人は様々な姿をしているものなのだ。

開眼大悟の要請で、様々な技能集団あるいはボランティアが組織された。組織の中に一人や二人は大悟と飲んで食って語らった者がいる。その上、年のわりには政治の世界にも長い。面識のある市町村都道府県の首長も多い。開眼大悟の顔の広さは半端ではない。

三日後、遅ればせながらに非常時対策総室長というポストが与えられた。どういう地位なのかわけのわからないものだったが、天皇陛下から非公式に直接、とはいえテレビ密着のまま、『よくやってくれました。これからも皆の為、よろしくお願ひします』とのお言葉を頂いた。

その場で大いに号泣する大悟には、世の中賛否両論だった。一年経って、少し落ち着いた頃、海老沢は勇気を振り絞って、

笹原に弓子の最期の言葉を伝える決意をした。

大悟は全く私生活のない日々を送っていたが、忙しさの点では、笹原も変わらなくみえた。

「ゆっくり話す必要があるんだ」

そう言っただけで無理矢理自分の部屋に呼んだ。

「酒、一杯ぐらいいは付き合えよ。今日ぐらいいいだろう。弓子さんの一周忌だ」

笹原は頷いて、杯を指し出した。

『私ずっと、よっちゃんに謝りたい事があつたんです』

弓子の言葉が蘇る。同時に

『妹をつくって、いっしょに幸せに暮らして』

透子の最期の言葉を伝えた時の惨劇も蘇った。

『私、怖くてあれから一度もよっちゃんの前で透子の名前を出せないでいるの』

弓子はそう言った。それは海老沢とて同じである。

どうしても、言葉を濁してしまふ。今も

「亜子ちゃん、頼子先生の所にいるんだって？」

近況話を逃がす。

「ああ」

杯の酒を口に運びながら、笹原は気のない返答だ。

「お父さんの所に帰りたいって、電話があつたぞ」

笹原が顔を上げる。ピンとこない顔だった。

「お前の所に帰ってきたって」

海老沢が曇み掛けて言う。

「それは無理に決まってるだろう。あの夫婦ならちゃんと亜子の面倒をみてくれる。俺は忙しすぎるし、もともと家でゆつくり顔を合わせたことなんてないんだ。顔を合わせたって、話す事もない。そもそも娘だなんて思った事がない。弓子が世話しただけで……」

「世の中の娘と父親なんてのはそんなもんよ。家での接点なんてたいしたことないのさ」

「帰ってくる事なんて、考えもしなかった。このまま、あの夫婦の子になれば、幸せに暮らしていける」

「なんだ、その言い方！ おまえのそのもの言いじゃあ、確かにその通りだ。頼子先生の子になつた方が幸せだろう。父親としての自覚はまったくくないらしい。でも、亜子ちゃんは自分が

幸せになりたいわけじゃない。お父さんの世話がいんだ」

「そんなもんはいらない。一人でやっついていける」

「弓子さんとの約束だから。大好きなお母さんとの約束だからって言ってたよ」

「そんな約束はいらない。俺を世話するなんて、価値がない」

海老沢の心は迷っていた。この頑ななままの男に本当に伝えていいのだろうか。弓子の残した最期の言葉を。

あんなにも優しい透子の言葉も、この男には届かなかつた。あろうことか自分の男性器にナイフを突き立てた。どれほどの

激情がこの男の中にあるのか、海老沢は知っている。

「亜子ちゃんと弓子さんは本当の親子になってた。だとしたら、お前にとつても亜子ちゃんは娘なんじゃないのか」

「俺の娘は透子だけだ」

「お前の口から、またその言葉を聞くとはな」

あれから、四半世紀も過ぎたのに、同じ言葉が笹原の口から零れ出た。海老沢を苦しめ続けた言葉である。笹原を死なせるところだった。あれほどの虐待をやっと生き伸びた命を不用意な一言で打ち砕くところだった。

海老沢は決心した。

だからこそ、弓子の言葉を伝えよう。その結末がなんであれ、すべて引き受けよう。

一枚のメモ用紙とボールペンを笹原の目の前に置いた。

「ここに透子ちゃんの名前を漢字で書いてくれ」

不審な顔をしながらも笹原は

『透子』と書いた。

海老沢はその紙を手にとるとしみじみとながめ、隣に

『十子』と書いた。

そして、その紙を笹原の前に戻した。

「弓子さんは最期に、よっちゃんにどうしても謝りたかったと言っていた。お前の前で透子ちゃんの名前を口にする勇氣がなくて、ついに謝ることが出来なかったと」

「謝りたかった？」

「お前さあ」

海老沢の笹原を見る目は優しい。

「十子っていう名前つけるつもりだったんだって」

海老沢は紙に書かれた『十子』を指さした。

「たくさん子ども作って、九太郎とか八重子とかってつけたがつてたつて」

「……」

「弓子さん、どうしてあの時反対したんだろうって。透子ちゃんが消えるようにいなくなってしまうって、どうして十子ではなく、透子さんで名前をつけさせてしまったんだろうって、謝りたかったって」

笹原は、うつむいたまま、いつまでも顔を上げなかった。

しばらくして、嗚咽がこぼれた。

落ちた涙に透子の名が滲んだ。嗚咽は、途切れ途切れに静かに長く続いた。

「弓子の幸せだけを願えば良かった。」

弓子が俺の幸せを願ってくれたように、ただ彼女の幸せだけを願えば良かった」

初めてヨリが泣くのを見た。

その震える肩に、若い夫婦が他愛なく笑いながら初めての子ども名を語り合っている姿が、重なつて見える気がした。

十年経てば、記憶は風化していく。開眼大悟は暴漢に殺された。かつての英雄は一介の政治家に成り下がり、暗殺によって、

再びヒーローに祭り上げられた。彼が変わったのか、人々が変わったのか。いや、人の求めるものが変わったのかもしれない。

大悟のブレインは、彼の死と共にすべて去った。

雪那はその前年に亡くなっていた。その時から大悟は『もういつ死んでも心残りはない』と言っていた。

それにしても、十年で数万人にまで膨れ上がった瑛佑の信者たちが、あつという間に姿を消したのは不思議だった。まるで空に上ったか、地に潜ったか。もとの生活に戻って暮らしていると報じるメディアもあったが、その報道自体が彼らの工作だと断じるメディアもあった。十年前、瑛佑らによって助け出された人々の大半は、その後もずっと、自ら望んで彼らと共に暮らした、と言われている。

海老沢病院の地下から繋がっていたと言われるシエルター。核ミサイルにも耐え抜いたその存在が『銀の舟』と呼ばれていた事を知る者は少ない。おそらくは大悟と笹原の逮捕の原因となった、地下鉄工事にも関係すると見られたが、彼らが姿を消すと同時に、なにもかもがただの都市伝説と成り果てた。

二十年後、亜子の個展に海老沢と休場が訪れた。

「なかなか盛況ですね」

「ありがとうございます」

休場の挨拶に、亜子は笑顔で答えた。三十歳を越えた彼女はあの十三歳の時のまま、美しい大人の女性になっていた。

「本当に変わらないなあ」

海老沢の褒め言葉に

「もう、おばさんです」

と、月並みに答えてみたりする。

亜子の絵画の評価も、世間の認知度も二人は大して知らないし、気にもならなかった。本格的に絵を描きはじめてのは、ここ三、四年のことである。それまでは、引退した笹原を連れて、頼子夫婦の島の療養所にいた。療養所を手伝いながらの居候である。

笹原は、認知症と診断されていた。おかしくなり始めたのは大悟が死んですぐだった。海老沢が面倒を看るというのを『私は、笹原の娘ですから』と、頑として亜子が引き取っていった。

『今までの激務を解かれたら、ボケてもしょうがないよなあ』と、休場は呑気に見送った。

何度か会いに行ったが、笹原はまったく海老沢のことも休場のこともわからなかった。但し、島の人たちも笹原の前身を知らない。島ではただの狂気爺さんだった。子どものお菓子を盗ったり、遊びに入れてもらえないと泣いて駄々をこねたりする。母親たちは、無害な彼をいたわるよう子どもに教えた。娘が老人の面倒をとってもよくみていたし、島人はみな療養所の医師たちに親切にしてもらっていた。

穏やかな風土と島人の中で、笹原は子どもに戻った。いや、子ども時代を取り戻していた。

そして、ある日、川にはまって死んだ。

初夏の穏やかな日だった。

亜子がたまたま図書館で見た絵画の本にオフィーリアの絵があった。浅い川に仰向けのまま歌いながら流れていくオフィーリアの絵だった。

亜子は笹原の最期を絵に描いた。幸福な死だった。ほんの数センチの浅い水に仰向けに倒れた笹原は空を見ながら、歌いながら、微笑みながら、息を引き取った、そんな気がした。

「今日来たのは、これを君に渡したかったからでもあるんだ」

休場が鞆から一冊の本を出した。表にも裏にも何も記されていないかった。表紙を開くと

『離神』とある。

次のページには

『第一章』

もう一ページを繰ると

『四人の子がいた。兄と姉は人の子。弟と妹は神の子であった。かつての花里という地に住んでいた』

そんな出だしで始まる。

「休場大先生の最高傑作だ。大つびらには出来ない本なんで、こうして配って歩いてるってわけだ」

「そうですか」

亜子は、本を手でしみじみとなぞった。海老沢はそんな亜子の背を優しくぼんぼんと叩く。

「今日の主役を独占したら失礼だ。亜子ちゃん、俺たち二人は絵を見たらそのまま帰るから。じゃあな」

海老沢は二、三歩歩きかけて振り返った。

「それにしても、なんだ……結局、ヨリの奴は透子ちゃんのことだ通り、透子ちゃんの妹と幸せに暮らしたんじゃないか、そうだろう」

去って行く二人を見送りながら、亜子は深々と頭を下げた。

海老沢と休場は角を曲がると、風に煽られた気がした。二人の真正面に堂々と満開の桜が立っている。それが絵であることに気付くには時間がかかった。

圧倒的な桜。白居家の桜の古木。他を寄せ付けない。孤高のエンジェル。唯一の存在。

しかし、今は一人ではない。

その根に、しっかりと美しい若者を抱えている。

離神年代記 創世 終

(いつか 受難の章も書きたいと思います)